

耳の遠いキューピッド 5

——難聴だが明るい女子高校生が、落ち込んでいる難聴の男子高校生を元気づけ、彼の兄と自分の姉を結ぶ恋のキューピッド役に——

弁財天恋に死す 93

——兵営内に祀られていた弁財天が、下界の兵に恋し、戦死する宿命にあったのを、他の者のそれとすり替えた罪により天界から追われ、非業の最期を遂げる哀話——

文学賞のゴースト作家 175

——生前、一高時代の親友が文学賞を受賞、自分ももと恋人の孫娘の手で文学賞を取るが……。二〇〇四年秋、百三十年の歴史を閉じた一高同窓会へのレクイエム——

戦国謀将 257

——味方にも秘めた奇策を凝らし、女忍くうを駆使し、秀吉の天下取りを助けた黒田官兵衛の前半生を描く——

残された手を握りあつて 339

——幼い頃、兄妹同然に育てられたが、妹は強盗殺人事件で、兄は中国戦線で片手を失う。再会した二人は結婚して、大陸を舞台に四十年の純愛を貫く——

あとがき(筆者・私の履歴書)

420

【登場人物】

本間（幽霊作家）
典子（女子大生作家）
藤森（作家・本間の旧友）
とせ（典子の祖母）
美和（典子の母）
妙子（現代舎の婦人記者）
江口（文芸出版記者）
雅美（女子大生・典子の親友）
理恵（女子大生・典子のライバル）
神谷（典子の恋人）
山下（女子大助教授）
佐竹（毎朝新聞文芸部長）
中山（文芸出版編集局長）
坂崎（現代舎重役）
柴田（現代舎編集局長）
看護婦（二高医務室）
信太郎（とせの弟）
隆夫（本間の弟）
その他

【あらすじ】

藤森が随外賞を受賞、これを祝う会の片隅で本間の霊が、俺だつてとつぶやく。二人は共に旧制一高で作家を志望した仲だった。
女子大生の典子は、ゼミの山下助教授に勧められた随外賞候補作に提出の作品で悩んでいた。そこへ現れた本間の霊の言うがままに、典子はペンを走らせる。題して『老残記』。山下も随外賞選考委員も、本間の霊に操られ、『老残記』が随外賞に選ばれ、典子は美貌の女子大生作家として人気を博す。現代舎の企画で、典子と対談した藤森はすっかり好意を抱き、典子もかつて母から聞いた一高への郷愁から、藤森へ親近感を抱く。典子の第二作目『鉄は熱いうちに』がテレビ化、その稿料で購入の新車試乗に藤森は誘われ、駒場東大前へ。戦後、この辺に、典子の母と祖母が住んでいたと聞いた藤森は、典子の作品の文体が本間に似ていることに気付く。
藤森は、本間と典子の接点を求め、本間の故郷佐渡へ渡る。本間は既に死に、遺された日記で、文学賞への執念を知る。そこへ妙子から電話があり、典子の祖母はとせ。日記によれば、とせは本間の一高時代の恋人だった。その夜、ホテルの藤森の枕許に現われた本間の霊が語るには、戦後、再会したとせは幼い美和を抱えて、パンパン生活に身体を壊しており、二人を引き取って、カストリ雑誌での荒稼ぎが始まったが、とせは病み疲れて世を去る。文学賞を取って下さいと遺言して。だが、本間の作品はどこから相手にもされず、彼自身も世を去ったのだった。
藤森達は、三浦でウインドサーフィンを楽しんでいる典子に、祖母の恋人だった本間の霊が纏わっていたことを告げ、典子も正体不明の霊の言うがままに、ペンを走らせていたことを告白。書き上げた第三作『転落』の原稿を取りに、自分の部屋へ戻った典子は、本間の霊とベッドで結ばれる。海岸沿いに走る典子の車、これを追う藤森達の車、直進を命ずる本間の霊、絶叫する典子、転落する車、海面に散乱する原稿。

○太平洋戦争勃発

昭和一六年一二月、太平洋戦争勃発。
ハワイ真珠湾奇襲、マレー沖海戦、
シンガポール攻略、コレヒドール陥落。

○夜の東京

昭和一六年春、東京皇居前、戦勝祝賀の提灯行列。

○旧制一高駒場寮

寮生が出払い、灯りの漏れている部屋は少ない。

その一室、作家志望の藤森淳作と本間吾郎の二人。

藤森「みんな提灯行列に参加で出払いとは？」

本間「本郷時代の先輩が嘆いてるだろうね」

藤森「これからはこういうことが普通になると思うよ」

本間「うん、時局便乗が安全だからな、これじゃ、自由に物を書くのも難しくなるな」

藤森「今だって俺の書く物は嫌われてるんだ」

本間「そうらしいな、お前が一昨年毎朝に書いて好評だった『さまよい船』なんかはおよそ時局にマッチせんもの」

藤森「本間、俺な、一高辞めようと思うんだ」

本間「辞める？」